

# 高次脳機能障害者の絵画活動による生活の質向上の検証

TBIリハビリテーション研究所／NPO法人 ティービーアイリハビリテーションセンター  
〒110-0008 東京都台東区池之端4-10-10

## 助成事業の概要

従来の訓練材料としては、当所で独自に作成（一部市販されている）した練習帳を使って認知訓練をしてきたが、外傷性脳損傷の後遺症の1つである保続現象の現れと思われる絵画活動に毎日の数時間を使っている方が現れ、注意力の改善は絵画活動を通じて出現した。そこで、絵を画くことが認知訓練になるかどうかを判定するため、今回の試みとなった。訓練期間は一年間を使い、その内容は主として絵を描くことを家の活動として、1週間に1回絵の先生にチェックを頂き、絵が上手になるとともに絵画活動によって、認知機能の向上を目指すとともに、練習帳訓練ではあまり認められない、情緒面での改善の有無を検討した。客観的な成果の指標として注意力の神経心理学的テスト（日常の注意テスト、英国製、TEAと略称）と生活の質の向上を検討できる可能性を持つ、WHOQOL質問票（金子書房）を使用した。従来の練習帳形式と同じような4つの原則による訓練をもくろんだが、家庭で毎日という原則は必ずしも守られなかったが、参加者は教室内では皆熱心に絵を描いた。

## 事業の成果

毎週の絵の教室参加者は6名であった。さらに調布ドリーム施設の参加者6名を含めて、合計12名で発足し、絵の先生は近くにある東京芸大の2名の先生に絵の指導を依頼した。1年間の間当所6名のうち、1名は入院し、1名は途中中断

で、当所で注意力、TEAとWHOQOL質問票の訓練前後の資料は4名になっていた。協力団体の6名は、WHOQOL質問票のみを施行された。参加者が少なかったために統計処理の対象にはならなかったが、当所の絵の教室参加者4名の方のWHOQOL質問票で、前後のプロフィールとQOL平均値に変化がみられた。1名は勤務先の問題行動によって作業内容が変化したことで、WHOQOL質問票に肯定的でない変化もあったが、他の3名については項目1の身体的領域、2の心理的領域、3の社会的関係、4の環境のうち、身体面の改善のあった1人については、心理的領域、環境に5点以上の肯定的な変化があった。本人は楽しかったと言っていた。身体的領域の多少の点数減少があったが、心理的領域が5点、社会的領域が3点の増加を示した1人はとても熱心に絵を描いてきて、1ヶ月に2枚程度の完成品を持ってきた。他の1人は身体領域は不変だが、他の3領域に肯定的変化を示していた。つまり、社会的問題の無かった3名は明らかに生活の質の向上を示したと考えられた。

絵の訓練をしていない当所在籍者、協力団体の参加者ではWHOQOL質問票の結果は肯定的でなく、協力団体での間接的な指導での絵の効果は認められなかった。

少数例で結論を出すまでにはいたらなかったが、3名の心理的領域の肯定的変化がもっとも著明で、社会面と環境がそれに続いた。結果として、そのような生活の質の変化が、絵画活動により認知機能よりも心理的変化に肯定的に作用したことが考えられた。いずれの方もTEAの認知心

理学的変化は認められなかった。

## ■ 成果の広報・公表

---

成果は近くの藍染めギャラリーを2日間借りて公表した。50m位しかはなれていない会場であるために、成果を見に来られた方に当研究所にまでお出で頂き、成果についてのご意見を頂くことができたのは好都合であった。30名の参加があった。付随の写真や脳の回復の表紙、内容の一部を参考のこと。また、この事業のQOLの変化については

症例を増やして、統計的処理をして、成果の発表としていく予定である。添付して表については、当所が毎月第4土曜日に開催している研究会ですすでに報告してある。また、この報告は次号のNPO機関誌である「脳と回復」、2015年夏号に乗せることになっている。

## ■ 今後の展開

---

今後この活動を続けたいという方が4人中全員であったので、広く会員を募集して、絵の教室として、4月から再出発することになった。一般の方を交えての外傷性脳損傷者の方の絵画活動がどう代わっていくか検討したいと思っている。予算的措置がなされないので、今後は月に5000円の会費を取って先生方が、独自で運営されていくというので、成功を祈っている。外傷性脳損傷の方には引き続き追跡調査として、注意力の認知機能とWHOQOL質問票を施行して行く予定である。